

自閉症児者の母親と同居の祖父母の良好な関係を築く 要因に関する研究

富山大学 水内豊和

Factors about how to establish the good relationship between mother and grandparent who have children with Autistic Spectrum Disorder

University of Toyama, MIZUUCHI, Toyokazu

要約

母親と祖父母との関係は双方が影響しあって築いていくものであると考えられる。一方で、子どもが自閉症児であるケースにおいて、これまでの研究では、母親と祖父母との関係についての研究は見られるが、それらは、母親のみ祖父母のみといった片方のみに対するものであり、母親、祖父母というペアに対しておこなわれたものは見当たらない。また、母親と祖父母との関係について、それぞれにストレスや悩みを抱えているというようなネガティブ面を指摘するものは多数あるものの、良好な関係を築くためには何が必要なのかという点については検討されていない。このようなことから、本研究では、「比較的良好な関係」を操作的に定義し、その条件に見合った自閉症児者の母親とその同居の父方祖父母を対象としたインタビューを通して、比較的良好な関係を築くための要因について検討した。

【キー・ワード】 自閉症スペクトラム障害, 祖父母, 母親, 良好な関係

Abstract

The relationship between mother and grandparent is established by their own effort to make a good atmosphere. In the case of children with Autistic Spectrum Disorder (ASD), there are few study about the relationship between mother and grandparent, but focus on only one side (mother or grandparent), and almost studies deal with negative aspects like a stress and anxiety. There is nothing to attention to the factors about how to establish the good relationship between mother and grandparent who have children with ASD. This study examines to the successful factors through the interview about how to establish a good relationship for mother-grandparent pairs. The records of words were analyzed by using Modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

【Key words】 Autistic Spectrum Disorder (ASD), grandparent, mother, good relationship

問題と目的

一般的に、母親は子育ての相談相手、情報源として自分の父母（母方父母）をあげる者が多く、それができている母親の子育てにおける不安は低いことから、祖父母の孫との関わり方や適度な育児への参加は、母親の不安を低くするという（八重樫ら，2003）。このように、子育てにおける祖父母は母親にとって有意義な存在になりうる。一方、障害児の家族について目を向けてみると、丸山（2013）は、母親の就労と祖父母による援助について調査し、障害児の母親の就労は祖父母の援助によって支えられているとしている。また、聴覚障害児の祖父母は障害のある孫と関わる中で得られた学びを認識し、より孫に対する愛情が深くなること、そして祖父母は孫を通して新しい出会いや、経験、学びにつながり祖父母自身の生活や人生を肯定的に受け止め充実感を得ることができるとの報告もある（今野，2003：2011）。このように、障害児の母親にとって祖父母は重要な機能をもつと考えることができ、また祖父母にとっても孫と関わることで生活の質の向上にもつながると考えられる。

一方で、障害児を育てていく中で母親と祖父母の間に葛藤が生じることも少なくない。今野（1998）は、同居の父方祖母に対する母親の意識を調べ、障害児の母親は健常児の母親と比べると同居の父方祖母に対して、祖父母は子どもに甘すぎる、厳しすぎるなど、子どもとの関わり方や自分と祖母との関係に対して不満をもっているとした。また今野（2009）は、全国の発達障害者支援センターに質問紙調査をおこない、祖父母から相談を受けている発達障害者支援センターは半数を超え、相談内容については自分（祖父母）と孫の親との関係についての内容が少なくないこと、母親からの祖父母についての相談も半数の発達障害者支援センターが受けていることを報告している。これらのことから、母親、祖父母の両者が障害児の養育に絡んでお互いのことで悩んでおり、関係を築くことの難しさが推察される。

3世代同居世帯数は減少しつつあるが、そのうち父方祖父母との同居の方が母方祖父母との同居に比べ多い（平成17年国勢調査）。一般に祖父母と同居する母親は核家族の母親よりも家族の中で役割を果たすことに関してストレスを多く抱えている（赤平，2002）。これは障害児の母親にも当てはまるのではないかと考える。松岡ら（2002）は、子どもの障害を「母親のせい」といわれた経験がある母親は抑うつ得点が高いことを明らかにし、母親に対して「母親のせい」といった対象でもっとも多かったものが夫の親（父方祖父母）であることを報告している。また、障害の種類による着目でも、その他の障害種と比べて自閉症児の親のストレスが比較的高いと報告されている（稲波ら，1994）。さらに、徳田ら（2002）は障害児の母親に祖父母との関係での悩みを調査し、自閉症児の母親の半数は祖父母が孫の状態を理解していないと答え、このことは、自閉症の障害特性が理解しにくいことと関連していると指摘している。

母親と祖父母との関係は双方が影響しあって築いていくものであると考えられる。一方でこれまでの研究では、母親と祖父母との関係についての研究は見られるが、それらは母親のみ祖父母のみといった片方のみに対するものであり、母親、祖父母というペアに対しておこなわれたものは見当たらない。また母親と祖父母との関係について、良好な関係を築くためには何が必要なのかを検討することは先行研究での課題とされている。以上より、本研究では、自閉症児・者の母親とその同居の父方祖

父母が比較的良好な関係を築くための要因について、母親、祖父母に対してそれぞれインタビューをすることを通して検討することを目的とする。なお、今回は母親との交流頻度が最も多い父方祖母に限定し研究をおこなうものとする。

方法

1) インタビューの対象

北陸地区の発達障害者親の会に所属する自閉症者の母親と同居の父方祖母とし、「比較的良好な関係」を操作的に定義した以下の条件を満たしたペア 4 組 8 名とした。

- ① 家族間の適当な意思疎通がある
- ② 3 世代同居への肯定的な意識がある
- ③ 障害がある孫への肯定的な意識がある
- ④ 障害児・者に関しトラブルがない乗り越えた
- ⑤ 母親、祖母との関係は悪くはないと感じている

これらの項目は傍証として家族機能測定尺度(草田ら, 1993), 3 世代同居意識尺度(水上ら, 2009), 孫-祖父母関係尺度(田畑ら, 1996)を測定し、健常群の平均得点と同等あるいはそれ以上を示すものとした。

2) インタビューの内容

今野(1998)、徳田ら(2002)の研究を参考に、(1) 障害の知識・理解、(2) トラブルについて、(3) 祖母・母親の存在について、(4) 相談相手について、(5) 祖母・母親との関わりについて、(6) 母親・祖母自身について、とした。

3) インタビューの手続きと倫理的配慮

母親・祖母を別の時間、場所において半構造化インタビューを実施した。分析に使用するデータは対象者に同意書に記名を求めた上で、IC レコーダーで録音し書き起こしたものとし、インタビューの記録は厳重に管理した。得られた結果は両者に知らせないことも同意を得た。

4) データの分析

インタビューで得られた逐語録をもとに修正版グラウンデッドセオリー法(M-GTA)を用いて分析をおこなった。母親と祖母の良好な関係がどのような過程で成り立ち、どのような要因が影響を与えているかを明らかにすることを分析の目的として設定した。

本研究で、どのように分析を進めたのかを木下(2013)の示す M-GTA の手続きに基づき具体的に説明する。まず、分析するにあたり分析焦点者を母親、父方祖母とし、分析テーマを「自閉症児・者を育てる母親とその同居の父方祖母が比較的良好な関係を築く要因」とした。つぎに、インタビューによって得られた母親、父方祖母の語りを逐語録化したものを読み内容を把握した。分析テーマに関

係のありそうな箇所注目し、それを一つの具体例とし、具体例を解釈し概念名を生成した。概念を作る際に、分析ワークシートを作り、概念名、定義、具体例、理論的メモなどを記入し、さらに分析を進める中で、新たな概念を生成した。なお分析ワークシートは個々の概念ごとに生成した。また、他の具体例をデータから探し、ワークシートの具体例の欄に追加していく。生成した概念は恣意的にならないように類似性の比較、対極例の観点から見てワークシートの理論的メモ欄にアイデアを記入した。つぎに複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した。カテゴリーにまとまらない概念はそのまま独立した概念として扱った。そしてカテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔に文章化し、結果図を作成した。分析は、特別支援教育を専門とする学生を加えた計 4 名でおこなった。

表 1 に、エピソードの分析過程で作成するワークシートの記述の一例を示す。

表 1 分析ワークシート (一部抜粋, 原文ママ)

概念名	子どもは幸せであるという思い (概念3)
定義	他の障害のある子や他の孫と比べて幸せだと思ふ
具体例	わたしもうちの嫁さん、あのN支援学校、毎年運動会連れてもらった。うん。毎年、連れてかっしやったよ。私本当3年間行ってきたよ。あの卒業式にも行ってきた。だから、うちの嫁さん本当母娘みたい。本当に。それは感謝する。普通のあの嫁さんやったら連れてかんにか。高校になったら運動会なんか連れてかん。それをKの支援学校連れてかっしやった。だから、いろんな子どもあれから見たらWくんはやませやなと思ってきた。やっばい。いろんな子おるからね。運動会本で行ってきた。3年間、5月に。支援学校春やったと思う。5月、田植え終わってから。行ってきたよ。3年間も続けていったよ。そのかわりあっこ行ったら「えー」って言われんよと。いろんな子おるからね。あいうがみたら、Wくんまだこういうがで幸せやなと思った。いろんな子おるわ支援学校。いっちょまえの子ばかりじゃないん。でも、勉強さ私もこうやって出してもらうから勉強できるん。ね。ありがとございました。(A氏祖母18)
理論的メモ	他の障害のある子を実際に見て知って孫は幸せだと感じる。一障害の程度によってもかわってくるのかも？ 家族から可愛がられる孫は幸せだと感じる。

結果と考察

1) 概念・カテゴリーの生成について

4 家族にわたる全 8 エピソードを分析した結果、43 の概念と 17 のサブカテゴリー、11 のカテゴリーが得られた。なお分析で得られた具体例は「」, 概念を [], サブカテゴリーを《》で、カテゴリーを【】で表す。以下、カテゴリーごとの概要を説明する。カテゴリーについては、大きく母親のみに見られるもの、祖母のみに見られるもの、そして母親・祖母の両者に見られるものに分けることができた。なお C・D 家については具体的な語りの記述の掲載には賛同を得られていないため、以下の結果と考察の中では具体的エピソードの記述は割愛する。

(1) 【障害を母親なりに受けとめようとする思い】(母親)

このカテゴリーは《子どもの障害を前向きにとらえる思い》, 《障害があったからこそ気付くことができたという思い》, 《家族のうちのひとりという思い》の 3 つから構成される。母親は、医者から診断された際に、「障害もってるっていうことは、結局なおらんっていうかさ。こういう子なんやわって思ったからさ、あっすつきりって。」という A (母) 氏の語りからは医者の診断で障害を特性としてとらえ日常生活の充実を目指そうという気持ちの転換があった様子が見られた。また、「存在をですか? 存在。家族のうちのひとり! —中略—でも、これ言ったらちよっと、うんでもしゃべりませぬ。えっと、変なことを言うなと思う、思われるかもですけど、なんかう〜ん B 男は私にいろいろ気付かせるために生まれてきたのかなって思ってます。」という B (母) 氏の語りから、子どもに障

害があったことで自分が気付くことがあったと感じている様子が見られた。「嬉しかった、楽しかったことはいっぱいあって、別に B 男だからってことじゃなくて、3 人同じように嬉しかったですし、楽しかったです。でも B 男のもっているものとか障害とかっていうのを考えたらここまで良くやったなっていうのがたくさんあって、そういうのはいくつもあります。」という B (母) 氏の語りから子どもの障害特性によって苦手なことができたときの喜びや成長を感じる瞬間があったことが嬉しかったという様子がうかがえた。そして、障害がある子どものことを、障害の有無でとらえるのではなく家族のうちのひとりとして他のきょうだいなどと比べることもなく関わってきたことがわかる。母親が子どもの障害を医者から診断され子どもの障害についてどのように考えているのかをまとめて、【障害を母親なりに受けとめようとする思い】とした。

(2) 【祖母の子どもや母親との関わりに対する満足】(母親)

《家事育児をしてくれる祖母への感謝》、《家族関係への満足》からなる。A (母) 氏は「昔はばあちゃんが、洗ったりしとったけど、そんなんやとってても、しょうがないからと思って、「ばあちゃん、そういうがじゃなくて、今度もしばあちゃんもし入院したときに、あたしがやったときに大変やにか。それと子どもたちに茶碗でも洗わせなだめやから、しとかっしゃい。」って言ったあと、「うん、分かった」って感じで。—中略—まあ別にうちらそれ[障害があるということ]を否定するわけでもないしさ、おったからうーんすごい人だな—と。」と語っており、「自分も仕事をするとときに仕事を休まなくてなんで、やっぱり見てもらえる人[B (祖母)]がいるってことはすごくありがたいことで、本当は幸せなことだなと思って、そのときによく気付いたんです。だからすごくうーん、存在としたらたくましくって、ありがたい存在です。」と B (母) 氏は語り、子どもとの関わり方について祖母に話した際に祖母が納得して関わり方を変えてくれるなど協力的な態度であったことに対して感心しており、さらに障害について否定せず関わってくれる祖母への感心や祖母が家事育児をしてくれたことへの感謝が見られた。よってここでは、【祖母の子どもや母親との関わりに対する満足】とした。

(3) 【子どもに関する祖母への不満】(母親)

《祖母との価値観の違いへの戸惑いと不満》から構成される。B (母) 氏は「なんか子育てに対する価値観が[祖母と]違うところがあるので、で、自分は三交代もしてたし、お母さんにも見てもらってて、で、えっと、夜勤あけで帰ってきてもお母さんが見てくれてて、私は寝られっていう状態だったからそれは楽だったんですけど、私、だれが親かかっていう気持ちはずっとあって、自分が子育てしたかったなっていう気持ちで。」や「[子どもが学校に通っていた頃は]チャレンジ[学校の宿題として家の手伝い]をしているんで、チャレンジやから、だから B 男にさせて、全て自分[祖母]でいたいから全て自分でするんですね。だからこれ B 男がすることやからって言って、お母さんしないでいい、B 男に任せてほしいって言うがですけど、そのときはなんか分かったようなこと言われるんですけど、2 日ほどたったらまた、うん。」などと語った。祖母との育児の価値観の違いに気付く戸惑っている様子や学校の宿題に協力してほしいという気持ちが見られた。よってここでは、【子どもに関する祖母への不満】とした。

(4)【実の両親やきょうだいへの感謝】(母親)

《障害のあるなしにかかわらず関わってくれる家族への感謝》から構成される。B(母)氏は、「さっき言ったように相談場所についても私を否定されて、皆に「違う」って言われるので、その辺はだめだったんですけど、妹がいるので妹に相談したりとか私は母親に相談するんですが母親はあんまり当てにならない。(笑)でも、母親にも児童発達支援センターに連れて行ってもらったりしていたので、そういう協力はしてくれて、で、妹も家にいたころは母親が都合悪いときは連れて行ってくれたりしていた時期が2年間あって、私は年長のときに[仕事を]辞めたのでその1年間は行きましたけど、そういう感じだったり。」と語り、A(母)氏は、「実家の母ちゃんとか。実家も近かったし。大事やよ！そう考えたらさ、本当に土日とかになって旦那がおらんときには、実家の父親母親と一緒に子育て、見てもらって写真とかやったらじいちゃん、ばあちゃんとファミリーパーク行ったとか、私がないんだよ(笑)私いなくて実家行ったり、しとったから。元気に孫元気やからさ、[A男が]変わってっても。」と語っていた。ここからは、障害の有無にかかわらず関わってくれる実の両親やきょうだいがいたことを嬉しく思っている様子が見られた。よってここでは、【実の両親やきょうだいへの感謝】とした。

(5)【障害を祖母なりに受けとめようとする思い】(祖母)

《障害があることへの戸惑い》、《障害を前向きにとらえる思い》から構成される。A(祖母)氏は、「[A男が]あたしとこでも来るがにでも、近所のおばあちゃんに「うちの祖母がお世話になっており、またお願いします」って言わすもん(笑)。けどさ、頭が知恵が遅れとるからかなとも思ったりもするし、でもそうやって言ってくれてありがとう。」と語り、子どもの言動が嬉しく思う反面、それは障害があるからなのかと思ひ、素直に喜ばず戸惑う様子が見られた。また、A(祖母)氏は「私もうちの嫁さん、あの支援学校、毎年運動会連れてもらってた。毎年、連れてかっしやったよ。私本当3年間行ってきたよ。卒業式にも行ってきた。—中略—あいうがみたら、A男はまだこういうがで幸せやなと思った。いろんな子おるわ支援学校。いっちょまえの子ばっかりじゃないん。」と語り、障害があっても子どもは幸せであると感じている様子が見られた。

障害について母親から聞いた際のことをB(祖母)氏は、「生まれてまもなくやね〜。—中略—私はそんな絶対大丈夫やろうって思っておった。そんなこと[子どもに障害は]ないと思うけど。赤ちゃんやから泣いとるんかなとか。全然気にしとらんだわ。」と語っており、母親が感じていた違和感を全く気にしていなかった様子がうかがえた。一方でA(祖母)氏は、「私ね、中学校あがったとき、特別学級？に入るときに、えっと思った。小学校1年生のときちょっと、私は障害あるなとは思いました。—中略—そつたらこの子障害じゃない？って思ったけど、親の言わんことおばあちゃん言われんにかね。そうでしょ？うん。で、かわいそうやなっております。」と語っている。ここからは、祖母自身が子どもに対して障害があるかもしれないと感じていたことが分かる。このように、祖母が子どもの障害に関してどのように感じ関わってきたかを語っているものをまとめ、ここでは【障害を祖母なりに受けとめようとする思い】とした。

(6)【母親の祖母や子どもとの関わりに対する満足】(祖母)

《母親との良好な関係に対する満足》、《子どものことを一生懸命考える母親への感心》、《祖母

の代わりに何でもしてくれる母親への感謝」からなる。《母親との良好な関係に対する満足》では、B（祖母）氏は、「(家族の関係の満足度は?) いいですよ! (100点満点やとどのくらい?) 100点満点やと、そうやね〜。85点くらいかな。(なんでですか?) まあいろいろ。別にほら、なんとかなうたりケンカしたり、そういうことしないしね。うん。(残り15点ってなんですか?) たまに、そうやね。まあいろいろあるわね。今何やって言われてもあれやけど。なんかやっぱり自分こうしようと思ってもしなかったとか。なんかちょっとしたこと。私はそんで上手いこといってるなと思ってるんやけど。」と語り今の家族との関係に満足していることがうかがえた。また、A（祖母）氏は、「支援学校の運動会に母親が祖母を]毎年、連れてかっしやったよ。私、本当3年間行ってきたよ。卒業式にも行ってきた。だから、うちの嫁さんとは本当母娘みたい。本当に。それは感謝する。」や「孫のこと…嫁さんしてくれるん、子どものためにしっしやるんやなと思う。子どもに対してこうやって大学とかによう行かっしやるのは感謝するわ。子どもに対して、A男に対してよく身体、自分の暇をおしんで行かっしやると思うよ。」と語り、B（祖母）氏は、「今は、[B男は]本当に私ら見とってでもなんでもするしね。うん。本当に、どういっていいか、自分でやるからね。私見とってでもえらいなと思う。(どんなことしてるんですか?) お掃除とか、お茶碗洗ったり、トイレの掃除したりお風呂の掃除したり、本当に何でもなんでもする! [きょうだいは]一人一人違うなと思うんです。[B男は]人の言うことは聞くしね。いつもやさしいと思う。お母さんが仕込んだがと思う」。ここからは、母親が祖母に積極的に学校の中での子どもの様子を見せる機会をつくっていたことが分かり、A（祖母）氏はそれをよるこんでいる様子が見られる。また祖母は母親が子どものことに関して勉強すること感心していたことも分かった。よってここでは、母親の祖母への関わり方や子どもへの関わり方に対する祖母が感じている感心などをまとめて、【母親の祖母や子どもとの関わりに対する満足】とした。

(7) 【無条件に可愛いという思い】(祖母)

《子どもに対する感心》から構成される。「そうやね。可愛いとしか思われん。」や「もうすっごいいいですよ! きょうだいにでも先輩になってあの、よその人になんでもして「ありがとう」とかね、ほんと言うがやぜ! 下の子と上の子はそんなこといわんけど。あの子は。」というA（祖母）氏、B（祖母）氏の語りから子どもが可愛いという思いが見られる。また、B（祖母）氏は、「やっぱり3人もおるから、やっぱり楽しいちゃね。—中略—B男ならよくしゃべるけど。上と下とあんまりしゃべらない。こっちから言えばかえってくるけどね。」と語った。また、「[家族からA男は]大事にされてきたよ。あの子幸せやと思う。—中略—例えばラーメンじゃろうとなんじゃろうと[A男に]食べさせてもらいました。向こうのばあちゃんじいちゃんと私らと行って食べさせてくれた。「ええ〜」って言うておつても出すとこよくよく、あれまたよくなが。だけど出すときは必ず出しておられた。あんたらもみんな親孝行しんしゃい。あの子[A(男)]はする。あのね、ばあちゃんじいちゃんちゃそんだけだけのあれなが。今まで、学校あがるって言えば、100円なり200円なりお祝いとしてくれたと思う。だからその返しやと思ってね。初めてなのっちゃ、それこそ涙出るほど嬉しいよ。」とA（祖母）氏が語っており、これらのことから子どもが積極的に自分（祖母）に関わってくれた祖母を含め家族を大切にしている子どもの様子を嬉しく感じていることが分かった。よってここでは、祖母が子どもに対して【無条件に可愛いという思い】とした。

(8)【余暇が充実していることへの満足】(祖母)

《周囲との関係への満足と感謝》から構成される。「だから同級生って一番大切ながやぜ。年いって。あんたらまだ若いときは、「いやいやいや」って言っとるけど。年いったら本当大事ながよ。私だから「あんた来るがまっつたが、またご飯行こう」って言われたら嬉しい。だから、そういうがにも参加しとるから私の体はお誘いあるからいいが。うん。友だちっちゃ大事なが。だから別れても大事なが。糸がこ〜うしてつながると思っで。」「編み物したり。ゲートボールしたり。そんなもんやわ。自分でそういうものもってるから。なんほかの事気にならんわ。(趣味あるほうが。) そう！なんもせんっていうがは辛い。何もなかったらどうでもちょっと頭の中に出てくるかもしれんけど。自分のことしとればね。もちろん！」と A (祖母) 氏, B (祖母) 氏は語った。ここから両者ともに楽しみをもって過ごしていることが分かった。A (祖母) 氏の場合は、ここで母親が A (祖母) 氏に外出を勧めていることも友だち付き合いが成立する要因として考えられる。また、B (祖母) 氏の語りからは、余暇をもつことで他のことを考えずにすむことを実感していることが分かる。よって、ここでは祖母が【余暇が充実していることへの満足】とした。

(9)【障害があったことで子どもを通じた出会いへの感謝】(両者)

《子どもを通じた出会いへの感謝》から構成される。「いろんなさ、活動に出合わせてくれる。やっぱり、私いろんな人と出会える。子どもの保護者、とかさ。いろんな人の出会いがあるなって思っで。うん。おもしろかった。だっで、こういうときに学生さんと会うことないよ。普通。こうなけんにか。」という A (母) 氏の語りや A (祖母) 氏の「でも、勉強さ私もこうやって出してもらうから勉強できるん。ね。ありがとうございました。」や B (母) 氏の「ことばの教室の何人かと今でも集まっでえっで、女子会みたいな感じで、この歳で女子会もおかしいかもですけど、その人たちだけじゃなくてその後から入っでこられた人とか、初めて会う人とかもいるんですけど、いいつながり。」という語りから子どもを通じた活動や人との出会いを嬉しく思っでいることが分かる。子どもに障害があったから出会うことができた人や活動、つながりを実感し感謝していることが分かった。よってここでは、【障害があったことで子どもを通じた出会いへの感謝】とした。

(10)【子どもの将来のことでの不安・願い】(両者)

《今後も上手に人と関わっでほしいという思っで》、《子どもの結婚への願っで》、《親亡き後の子どもの自立に対する不安》から構成される。「(子どもに望むことは?) ないわ。みんなに可愛がられる子にならっしやいっでだけのもので。仕事いっでも可愛がられる人にならっしやいっで言うだけやよ。—中略—その人らに可愛がられっしやいっで。そんで次入っでくる人を可愛がっであげっしやいっで。それしかないにか。」という A (祖母) 氏の語りからも子どもには周りの人から可愛がられるようにあっでほしいという思っで見られた。また、子どもの結婚について A (祖母) 氏は「嫁さんもろて、孫。私、同い年くらいの人ではや曾孫いる人おるよ。孫に嫁さんもろて、嫁に行っで、はや子どもできしやっさ。うん。だから、結婚してほしわ。子ども見たい。」と語った。結婚はしてほしが、できるかどうか分からないという心配の気持ちが推察される。一方で、母親は「将来とかさ、親亡き後、どうすらんかなっで。というがと、一応就職はできとるからいいんやけど。やっば親がなくなっでるときはどうすのかなっで言うのが一番大変じゃないかなっで思っで。」と A (母) 氏は語っ

ていたことからこれからの自立に対する不安も大きいことが見られた。B（母）氏の語りでは「とにかく仕事ができる人になってほしい、就職してほしい、仕事ができる人にするのが私の役目かなって
いうか。自分のことは自分でできて仕事してお金もらって、自分で生活できれば良いなと思って、それは小学校の頃から思ってたんですけど、なので国立大学の附属特別支援学校を選んできたんですが
（笑）」とある。ここから B（母）氏は子どもの社会的自立を一番に考えていたこと、またそれが自分の役目であるにとらえていたことが分かる。祖母、母親では将来の不安や願いへの思いは異なる部分もあったが、ここでは【子どもの将来のことでの不安・願い】としまとめた。

(11) 【お互い上手く関わりたいという思い】（両者）

《母親に遠慮する思い》、《祖母に遠慮する思い》、《自分らしく祖母と関わることへの満足》から構成される。《母親に遠慮する思い》として、「[子育ては]私はなんでもしないから。私が入ったらやっぱりなんかだめやろうから。みんなお母さん。あの人[B 男]はお母さんおらなだめ。はじめてやからね、分からんがね。ああいう子（笑）いやー、よくやってくれとと思いますよ。」という B（祖母）氏の語りからは祖母は子育てに関して出過ぎないようにしているということが分かる。関係が上手くいくポイントとして我慢するということをあげる場面もみられたが、祖母は年を重ねるごとに残りの人生などを思い寂しさを感じ気弱になることも考えられた。

一方で《祖母に遠慮する思い》では、「これがえっと本当の親子だったらなんでも好きなこといえるよとかって言われたりするじゃないですか。こうしてほしいとかいうことをその都度その都度[祖母に]言えなかった。」や「あんまり会話のときに、やっぱりちゃんと話をするときに気を遣うかな。ちょっと気を遣う。（言葉とか？）言葉やね。でもそれは年々うすれてきてます。（笑）でも0ではないなと思って。」という B（母）氏の語りからは、祖母に対して言いたいことを少し我慢することも

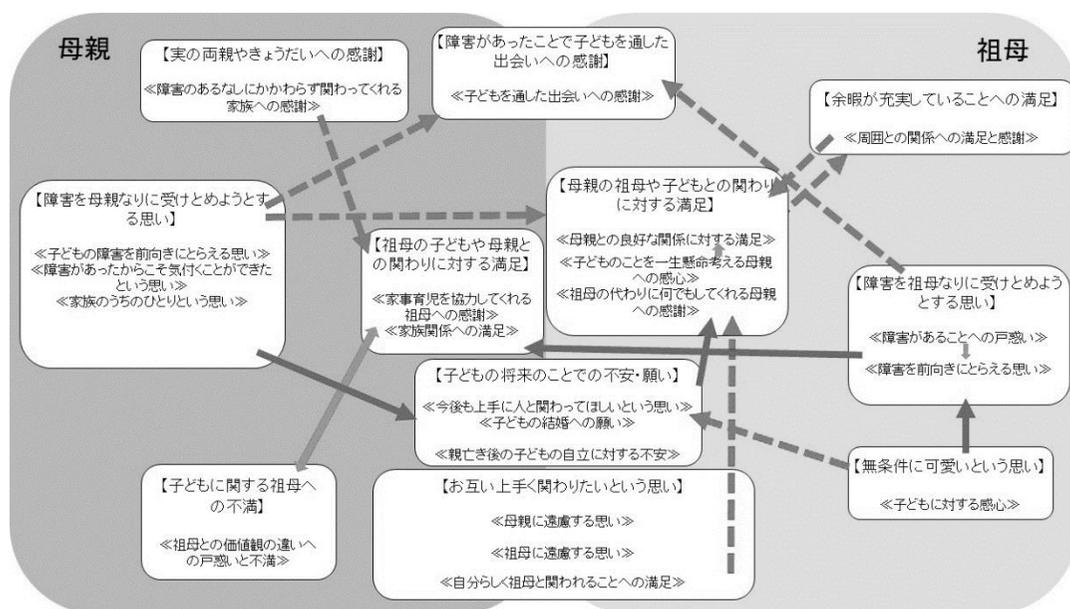


図1 母親と父方祖母が良好な関係を築く過程

あるということが分かる。しかし、「(祖母と関わるときに気をつけていることは?) 最近はあんまり気をつけてないかもしれない。」という B (母) 氏の語りから特に考えずに祖母と関わっていることが分かる。これらのことをまとめて【お互い上手に関わりたいという思い】とした。

2) 母親と祖母が比較的良好な関係を築く過程

17 のサブカテゴリーとそれを包含する 11 のカテゴリーの関係について図 1 に示す。この結果図ではカテゴリーを中心に、8 名のインタビューの分析により示された母親と祖母の比較的良好な関係に至る要因の過程を説明している。母親は子どもの障害を知り将来の不安を感じながらも、障害の有無にかかわらず関わっている。これを祖母は母親が子どものことを一生懸命育てている様子と感心し、さらに両者の関係に満足することにつながる。また祖母は子どもに対して一緒に生活する中で障害の有無にかかわらずひとりの家族としてとらえ可愛がっている。そして母親も祖母の関わり方に満足し、両者の関係に満足することにつながると考えられる。

総合考察

今回の研究では、自閉症児・者の母親とその同居の父方祖母が比較的良好な関係を築くための要因について、母親・祖母へのインタビューを通して検討した。そこから得られた母親と祖母の比較的良好な関係を築く要因について考察する。

1) 祖母の子どもの障害特性の自分なりの理解、子どもとの関わり

先行研究で徳田ら(2002)は、自閉症児の母親の半数が祖父母は孫の状態を理解していないと答え、障害特性が理解しにくいことと関連しているとした。しかし、本研究では、祖母は子どもと一緒に生活する中で障害を受けとめようとし、さらに自分なりに関わり方を工夫していることが分かった。[子どもと上手に関わりたいという思い]での B (祖母) 氏の語りのように、具体的に子どもと関わるときに気をつけていることを話す様子が見られた。このように生活する中で子どもの障害について祖母なりに考え関わっていることが分かった。このことは、祖母が子どもと関わる時間が自然と多かったことが推察され、今回回答した全家族とも共働きの時期があったことも関係していると考えられる。母親が仕事で家にいない時間を子どもは祖母と過ごしていた。そして自分だけではどうにもならない際に代わりに見てくれる人が祖母であったことに対し、母親は祖母が自分の育児を補ってくれていたことに感謝している様子が見られた。このように祖母が子どもと関わる事が多かったことも子どもの障害を理解し関わる事へつながり、さらには障害の有無ではなく家族のうちのひとりとしてとらえる事へとつながったと推察される。そして、祖母のこのような態度を母親は感心している様子が見られた。

また母親を含め周囲の祖母への関わりの中から祖母が障害を受けとめ関わりを工夫することにつながったとも推察される。たとえば A (祖母) 氏の語りからは母親が祖母と一緒に学校の行事に参加するように誘ったことで子どもの学校での姿や子ども以外の障害がある子を知ることができ、子ども

に対する考え方が変わったことが推察された。このように母親や教師などが祖母と関わる中で子どもの障害についての考え方や関わり方にも影響を与えたと推察される。

2) 見守る立場としての祖母

先行研究では、祖父母は決して育児の中心になろうとはせず、常に寄り添い見守る立場に身を置くとされている(石井ら, 2014)。このことはB(祖母)氏の「お母さんがなんでもしてるから。私はなんでもしないから。私が入ったらやっぱり、なんかだめやろうから。みんなお母さん。あの人[B男]はお母さんおらなだめ。やっぱり私らはああそうかなと思って。」という語りや、A(祖母)氏の「親の言わんことおばあちゃん言われんにかね。」という語りからも先行研究と同じようなことが言えるであろう。また、これは母親とのトラブルを回避し良好な関係を築こうとしているという石井ら(2011)の研究とも一致すると考えられる。本研究でもこのような祖母の関わり方が母親との比較的良好的な関係へと影響したと推察される。

3) 祖母の余暇の充実

[余暇の必要性を実感する気持ち]であげた語りのように、B(祖母)氏、A(祖母)氏ともに楽しみをもって過ごしていた。また余暇が充実することで余計なことを考えなくてよかったという思いをもっていた。余暇の充実は母親とのトラブルの回避にも影響したと推察される。

4) 母親の周囲の人とのつながり

[実の両親の子どもとの関わりに対する満足]でA(母)氏は「実家のかあちゃんとか。実家も近かったし。大事やよ!」と語っており、[子育てに協力してくれるきょうだいへの感謝]でB(母)氏は「妹がいるので妹に相談したりとか私は母親に相談するんですが母親はあんまりあてにならない(笑)。でも、母親にも児童発達支援センターに連れて行ってもらったたりしていたので、そういう協力はしてくれて。」と語っていた。[障害を家族に伝えることをためらう気持ち]をもつような際にも障害の有無にとらわれず関わる実の両親やきょうだいがいたことで気持ちが楽になったことも考えられる。そして、[子どもを通じた出会いへの感謝]でB(母)氏は「その昔からのつながりで、それは今も大事にしていきたい。ちょっとでもどっかにつながっていたい。」と語り、同じ境遇の母親同士でのつながりがあってそのときの不安などを共有してきたことが推察され家族の外でのストレス発散の場としても機能すると考えられる。よって、母親は気兼ねなく話すことのできる実の両親やきょうだい、そして同じ境遇の母親同士のつながりなどのソーシャルサポートがあり、それらは家族の中でのストレスや不安などを共有したり解消したりする機能を果たしていたと考えられる。

5) 母親、祖母の家族の中での役割

先述のように母親の就労から祖母は家庭での家事育児での役割を果たすことが多かった。そこから母親は「家事育児をしてくれる祖母のありがたさへの気付き」や「家事育児をしてくれる祖母への感謝」へとつながったと考えられる。一方で、母親は自分が働いていた分を祖母が子どもを見てくれた

ことへの感謝と、家族の中での母親としての役割を果たせなかったことへの不満もみられる。祖母にとって家事育児をすることは、家族の中での自分の役割であると考えているとも推察される。「買ってやるか、お金でお母さんに、たとえの話 1000 円でもいいが、送るパックにに入れてあるような、食べるようなんも送ってもらったり。そういうがして、あれしんなだめ。ばあちゃんにや、年金だけもらって、年金っておかしいけど、年金活かしていかによだめ、と思う。」という A (祖母) 氏の語りからは祖母として子どもにできることを自分の役割として考えている。これらのことから、家族の中で母親、祖母の役割のバランスが両者の関係へ与える影響も少なくなく、母親と祖母のお互いが役割を実感できることで良好な関係が構築されることが示唆された。

今後の課題

本研究では、母親と父方祖母 4 組 8 名へのインタビューを通して比較的良好な関係が成立する要因について検討した。しかし、家族の形はさまざまであり対象者を増やし検討することが必要である。また、祖母・母親の両者の関係にはそれぞれの性格も影響していると考えられることから母親・祖母の性格も含めて検討することも必要となるであろう。

謝 辞

本研究に快くご協力くださったご家族の皆様に、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 赤平理沙・大島巖 (2002) 三世同居と母子の心理的ストレスの関連についての基礎的調査. *こころの健康*, 17(1), 57-65.
- 稲波正充・小椋 たみ子・Catherine Rodgers・西信高 (1994) 障害児を育てる親のストレスについて. *特殊教育学研究*, 32(2), 11-21.
- 今野和夫 (1998) 障害者の祖父母についての研究-同居の父方祖母に対する母親の意識を中心に-. *秋田大学教育学部研究紀要教育科学部門*, 53, 45-53.
- 今野和夫 (2003) 通園施設における障害のある子どもの祖父母に対する支援. *秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要*, 25, 39-52.
- 今野和夫 (2009) 発達障害者支援センターにおける祖父母支援-センターへの質問紙調査を通して-. *秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要*, 31, 61-74.
- 今野和夫 (2011) 障害児の祖父母に対する支援についての展望. *秋田大学教育学部研究紀要教育科学部門*, 66, 45-54.
- 丸山啓史 (2013) 障害児の母親の就労と祖父母による援助. *京都教育大学紀要*, 122, 87-100.
- 松岡治子・竹内一夫・竹内政夫 (2002) 障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連に

ついて. 女性心身医学, 7(1), 46-54.

徳田克己・水野智美 (2002) 障害のある子どもを持つ母親と祖父母との関係-障害児を持つ母親を対象にした質問紙調査を中心に-. アジア障害社会学研究, 2, 1-8.

八重樫牧子・江草安彦・李是喜・小河孝則・渡邊貴子 (2003) 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響. 川崎医療福祉学会誌, 13(2), 233-245.

